
僕の犬は先生？！

神田春希

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

僕の犬は先生？！

【Nコード】

N9109J

【作者名】

神田春希

【あらすじ】

「一体なんだんだよ！」

僕は担任の加藤健一に呼び出されたと思ったら、きつく抱きしめられた。

男相手にそんな趣味ないっつーの！

でも、加藤の話を聞いているうちに、一緒に居るだけなら……いいかも？　なんて思うようになって……

僕にそんな趣味はありません

「ええっ?!」

僕は頭が混乱している。

そもそも寝不足だったから、こんなありえない夢を見ているのかもしれない。

僕は右手で思い切りほつぺたを抓ってみた。

ぎゅーっと抓ると……痛い。

やっぱり痛い。

どうしても痛い。

痛いってコトは……。

やっぱり現実なんだろうか？

でも、この状況……。

「やっぱりありえねえ……」僕は小さく呟いてみる。

「ちがう！　ありえないくない！　これは——俺の努力の賜物なんだ！」

担任の加藤は僕を抱きしめながら、そんな台詞を口に出している。努力の賜物って……そんな非科学的なことが？

僕は思考停止寸前の頭をなんとか動かす。

「先生——とりあえず、放してくれませんか？」

とにかく先生は大人だ。
しかも男だ。

力もあるので、中学生のか弱い僕は身動きがとれずにもがいている。

まるで蜘蛛の巣につかまった虫の気分だ。

そんなやつに抱きしめられ、虫の気分を味わっている僕は嬉しいことなど何もない。

あるわけが、ない。

——まあ、先生が女だとしても、年上だし、やっぱり嬉しくないんだけどさ。

「せつかく500年ぶりに会えたのに、離してたまるか！

俺はコウの為に雑用をさせられてたんだからな！」

僕の気持ちなどお構いなしに、先生は僕を益々抱きしめる。

だからー！ 意味わかんねえって！

「とりあえず放して！ 苦しいですって！」

僕はそう言つと、少し咳き込んだ。

先生はやつと、きつく抱きしめていたのを理解したのか、ぱっと手を離れた。

「い、ごめん。」

俺、あんまり嬉しくて、つい……」

先生はそういうと恥ずかしそうに僕を見た。

なんなんだ？ 一体。

「せ、先生ってそういう趣味が…… あつたんですか。

僕がどうこう言うことじゃないですけど、そういうことはちゃんと

相手が了承してからの方がいいんじゃないですか？」

僕は学ランの襟の部分を直しながら、言う。

「ちなみに僕にはそういう趣味はありませんので。

——用事もなさそうなので、僕はこれで失礼します」

僕は一応形式的にお辞儀をして、その場を去った。先生の日も見ずに。

僕のせいだったんだ

僕は家に帰る気にもなれず、学校の屋上で横になり、ぼんやりと流れている雲を見ていた。

雲はまるで生き物のように、いろんな姿に変化していく。

「……そんなこと、あるわけないじゃないか……」
加藤の話を思い出し、僕は小さく呟いた。
その言葉は風に舞い、どこかに吹き飛んでいく。

「……ケンタ……」
僕はぼつりとアイツの名前を呼ぶ。

アイツとはよく遊んだな。
こんな天気のとくによく――

じわりと涙が出てきて、僕の視界はぼやける。

つい、この前まで、僕の傍にはいつもケンタが居た。

当たり前すぎて、それが幸せだったと気づいたのは、アイツが車に轢かれてからだ。

「――畜生――」

僕はあふれ出てくる涙を隠すように、目の辺りを覆った。

「畜生……畜生っ！」

僕のせいだ。

僕のせいで、アイツは車に轢かれたんだ。

あの日、いつものように僕はケンタとの散歩に出た。

いつものコース。いつもの時間。いつも通りな筈……だったんだ。

ケンタは散歩が好きで、嬉しそうに僕と歩く。

——たまにくるくると回ったりしながら。

その時だった。

アイツの赤い首輪が、外れた。

アイツは首輪が外れたことに気が付きもせず、いつもやるようにリードをぴんと伸ばそうと体重をかける。

僕があっと思ったときには既に遅くて、アイツはよろめきながら車道に倒れこんだ。

それから後のことは——良く覚えていない。

「ごめんな、コウ……」

急に声をかけられ、僕は驚いて体を起こした。

「でも、本当に聞いて欲しいんだ……」

「加藤……先生……」

加藤はさっきまで泣いていたのだろうか？

声が少し震えていて、目が少し赤く腫れていた。

風になびくさらさらの髪の毛が、なんだかとても寂しく思えて僕の胸はずきりと痛んだ。

「……聞くだけなら……」

僕はポツリと言った。

そして僕は涙を流す

加藤は俺の横に座ると、ゆっくりと話し始める。

「さつきはごめん……」。

俺、コウの気持ちも考えずに自分の気持ちだけ押し付けてた。

……でも、コウにちゃんと言いたくて。

俺、色々頑張ったって褒めてもらいたくて。

俺が幸せだったって知ってもらいたくて。

——事故に遭ってごめんって言いたくてっ——！——」

そう言つと加藤は僕の目をまっすぐに見て、ぼろぼろと涙を流した。

僕が驚いていると、加藤は僕を包み込むように抱きしめる——さつきみたいな乱暴にはなく、優しく——

「俺、コウに拾われてから、嬉しいことばかりだったんだ。

散歩に行くときコウが『いくぞ！ ケンタ！』って言いながらリードを振り回すのも好きだった。

俺がちよっとしたへまをして、洗濯物をどろどろに汚しちゃったときも、コウは俺のこと庇ってくれて嬉しかった。

秘密基地で天体観測したのも覚えてる。

来年もまた来ようなんて約束したのに、その場所にマンションが建つてがっかりしたコウを見たときは本当に悲しかった。

だから俺、少しでもコウが笑顔になるのが見て居たくて、散歩のときくるくる回ったりしてたんだ。

笑ってるときのコウが一番好きだ。大好きなんだ。

——俺のせいでコウが苦しい顔してるのなんて見てられないよ。

あの事故は俺のせいだったんだ。
だから、そんな顔しないで……」

そう言うとな僕の涙ををぺろりと舐める。

「泣かないで……コウ……」

加藤が僕の涙をまた舐める。

僕の涙腺は意思に関係なく涙を製造していて、加藤はそれを止めようと何度も何度も舐めた。

——加藤だって涙止まらないくせに。

「も、もういいよ。——ケンタ……」

僕は無意識に大好きな親友の犬——ケンタの名前を呼んだ。

途端に加藤の瞳は輝きを増す。

「俺、俺の事。ちゃんと分かってくれたの？ コウ！
もう一度呼んで！ コウが付けてくれた俺の名前！！」

そう言うとな加藤は僕の胸辺りにおでこをくつつける。

それは、ケンタの癖。

僕に甘えるときにいつもする仕草だった。

「ケンタ……」

僕はもう一度その名前を呼んで、加藤の頭を優しく撫でる。

——ケンタにいつもするように——

その時から、僕と加藤の奇妙な関係が始まったんだ。

その話ホントですか？

僕は撫でていた手を止めて、ゆっくりと加藤を自分の胸から離す。すると加藤は少し高潮させた顔を不安そうに歪ませた。

僕はその見覚えのある表情にどきりとして、慌てて声をかける。

「違うよ先生——。」

さっきの話。もう一度、ちゃんと聞かせてもらおうと思って。嫌ってるわけじゃないよ」

僕は加藤の目をまっすぐ見て言う。

……それにしても、外見は全然違うのにちょっとした表情や仕草から『ケンタ』を感じてしまう。

全然意味わかんないけど、やっぱり加藤はケンタなんだろうか……。

「あ、うん。」

——さっきも言ったけど、俺『ケンタ』なんだ。ケンタの生まれ変わり」

加藤は自分の涙をぐしぐしとこすると、僕から体を離しまじめな顔で説明を始めた。

「——あの事故に遭った時も、ただコウの笑顔が見たかっただけなんだ。

でも俺、すっかり車に撥ねられちゃったろ？

あ、しまった！って思ったときには遅くてさ。

俺動けないし、コウは泣いてるし。もう悲しくて悲しくて……。そのうち俺の意識が無くなって、気が付いたら水先案内人が俺の手を引いて空に上っていったんだ」

「水先案内人？」

こくりと加藤が頷く。

水先案内人って、やっぱ魂を閻魔大王の所に連れて行く人……のことなんだろうな。

「そいつは俺が死んだって言うんだ。俺、死んだっていう意味すらわかんなかったから、とにかくコウに合わせろって吼えてさ……」。

煩いからってちょっとだけならコウの姿を見ても良いって事になったんだ。

——そしたらコウ、全然笑わなくなって、元氣も無くて、俺悲しくなっちゃってさ。

どうしたらコウの傍にいれるのかそいつに聞いたんだよ。でももう死んだから無理って……」

加藤の拳にぎゅっと力が入った。

「それでもなんとかお願いしてみたら、上司に相談してみるって言ってくれて……」

「上司？」

僕は素っ頓狂な声を上げた。
大体水先案内人の上司って……？

「あー……」。

そうだな……平たく言えば会社っぽい組織なんだ。
俺が最初に会った案内人は結構下っ端のヤツだったから」

「へえ。」

会社組織……」

加藤は軽く頷くと話を続ける。

「そこでその上司が話を聞いてくれることになったんだ。

俺、コウの傍に居たいって必死でお願いして……

そしたら……バイトを頑張れば出来ないことも無いって言われて……

……」

加藤はゆっくりと目線を僕からはずし、高い空を見上げた。

先ほどまでうるさいくらいに空を飛び回っていた雲はいつの間にか無くなり、真っ青な空がそこに佇んでいる。

「水先案内人補佐って仕事だった。

期間は<徳>が瓶いっぱいになるまで」

「徳？」

僕は加藤の寂しそうな横顔を見つめる。

「徳っていうのは、亡くなった人の魂が現世に未練を残さず、満たされた気持ちになった時に出来る真珠みたいなやつなんだけど……。そういうのが出る魂ってかなり稀で……瓶いっぱいにするのに500年もかかったんだよ」

「500年……」

……気の遠くなるような長い時間、ケンタは徳を集めるために必死でバイトをしたんだろうか。

まだ十数年しか生きていない僕には、まったく想像が付かないくらいの日だ。

——ん？

「ち、ちよつと待てよ先生」

僕は先ほどから引つかかっていたことを口にする。

「ケンタが死んで500年バイトしてたんだろ？

それが終わって、転生？ したとしてもさ。

先生は俺より年上じゃないか！

それっておかしいか？！」

僕はなんだか自分でも抑えきれないくらい感情的になって、つい口調を荒げた。

——もし、加藤が今にも泣き出しそうな顔をしていなければ、僕は胸倉を掴んでいただろう。

考えるより先に行動することってあるよね

「現世こゝの時間軸とあっちの時間軸はまったく別のものなんだよ」

加藤は僕の目を見ると薄く笑う。

「現世こゝには過去、現在、未来があって、それぞれは決して交わることの無い……例えるなら川みたいなもんだ。

川に笹舟を浮かべると流れに乗って下流へ行くだろ？

笹舟が人。川の流れが時間だ。上流が過去で下流は未来。

何かアクシデントが無い限り、笹舟は下流へ向かって流れていく」

加藤は右手を上げるとゆっくりと斜め下に手を動かす。

「そして——ここからが水先案内人の仕事だ」

足元のアスファルトに右手をぴたりと付けて加藤は続けた。

「流れの最後……つまりその人生が終わったとき、水先案内人が魂を回収。

その後魂は色んな事をして、再び何かに転生する。

人かもしれないし、動物かもしれない。虫になることだってある。

その時転生の世話をする水先案内人が、川のどの辺りからその魂の笹舟を流すかによって、どの時代に生まれるかが決まるんだ。

前生きていた時代よりもずっと未来かも知れないし、ずっと過去かもしれない。

だから——別におかしなことじゃないんだよ」

加藤はかなり噛み砕いて説明してくれたみたいだ。

確かにそういうことなら、ケンタが僕より年上でも問題ない……
と思う。

「でも先生。

もしそうなら、もっと前に僕に話してくれても良さそうなものじゃないですか。

そうしたら……ケンタだって死なずに済んだのに——」

僕はケンタを思い、きゅっと唇をかみ締める。

すると先生は静に首を振った。

「それは無理なんだ。

俺がここに居るのはあの交通事故があったからで、もしそれが無かったら俺はこの世に居ないことになる。

——それに、ここの世界のケンタが水先案内人補佐のバイトに付くまで、俺の記憶は封印されてたんだよ」

「封印？」

よくロールプレイングゲームなんかで聞く言葉だ。

とてもじゃないけど、現実世界ではあまり聞かない突飛な言葉に僕は思わず聞き返した。

「ああ。

『この世の理を犯すと大罪になる』と言われて……。

よっぽど俺が信用なら無かったんだろうな。

自分が消えてしまうことになっても、ケンタを事故から守るだろうって皆思ってたみたいだし……」

加藤は深いため息をついて話を続ける。

「もちろん漠然と何か大事なことを忘れてるのは、ずいぶん昔から分かってた。

もどかしくて堪らなかったけど、自分ではどうすることも出来なかったんだ。

記憶が戻って、真っ先にコウに言いたかったけど……俺、曲がりなりにも教師だし、こんな御伽噺みたいな事——コウだって信じてくれないだろ？」

そう言って加藤は僕をみて微笑んだ。

「先生……」

僕は言葉に詰まった。

辛うじて加藤は微笑んでいたが、その微笑はちょっとした事で壊れてしまうんじゃないかと思うほど危ういものだったからだ。

「——ごめんな。

付き合ってくれてサンキユ。

今の話……聞かなかったことにしてくれ……」

僕が言葉に詰まっていると、加藤は僕の頭にぼんっと軽く触れ扉の方へ歩いていく。

その後姿はシベリアンハスキーのミックスだったケンタそのもので、僕はたまらず先生を背中から抱きしめた。

「……コウ??」

「違うんだ。違うよ先生。」

あまりにも唐突で、僕頭の中がぐちゃぐちゃになっちゃって——!

……せ、先生はケンタなんだろ?!

だったら僕が言いたいことわかってるんじゃないの?

傍に居てくれるだけで、僕は、僕は——っ!!」

僕の声はもう声にならず、恥ずかしいくらい嗚咽が漏れる。

加藤はそんな僕に優しく「ごめん」と言葉をかけた。

何度も。何度も——。

第三回 星空の会

「先生。今度の『星空の会』はやっぱりペルセウス流星群ですよね？」

僕こと笹田^{ささだ} 孝太^{こうた}は天体望遠鏡の手入れをしながら質問をする。

「ん？ そうに決まってるだろ？」

なんてったって今世紀最大の天体ショーだしな。
早く見てみたいよなあ」

このうつとりとした声で返事をしている人物こそ、僕の担任であり天文同好会の顧問、加藤^{かとう} 健一^{けんいち}だ。

人懐っこい笑顔が女子に人気の23歳。

ひそかに加藤のファンクラブなるものまであるらしい。

—— 以外に『イケメン』なんだよな。

そして—— 数ヶ月前に亡くなった僕の飼い犬、ケンタの生まれ変わり……。

最初のうちはからかわれているんじゃないかと疑ったけど、加藤の話す内容はケンタ以外知らないようなものが多くて、認めざるを得ない感じた。

そんなことを考えながらぼんやり加藤を見つめっていると、呼んでもいないのに僕の後ろに来てあごを頭に寄せた。

「…… 先生？ ちょっとやめてくれませんかね」

僕は自分の頭にある先生の顔をどかさうと手を伸ばしたけど、加藤の手にあっさり捕まってしまう。

「こうしてると落ち着くんだよね。」

俺、コウの匂い好きだし」

「ちよっ！ 仮にも今は部活中ですよ！

こんなところ誰かに見られたらどうするんですかつ！」

僕は加藤から逃れようともがいたけど、力の差は歴然でまさに蛇に睨まれたかえる状態だ。（あれ？ 違うか？？）

「おいこら！ ケン——っ！」

『ケンタ』と叫んでる途中で加藤は僕からすつと離れた。

彼は部室への唯一のドアをじっと見つめて「残念」と小さく呟く。

「？ なんだよ残念って」僕が思ったその時、部室のドアが勢い良くがらりと開いた。

「遅くなりました」

息を切らせて部長——佐々木 美也子先輩が入ってきた。

ちなみに天文同好会の部員は僕と美也子先輩の2人だけだ。

「じゃあ部員もそろったし、そろそろ来週に迫った星空の会の話でもするか」

加藤がプリントを僕と美也子先輩に配る。

そこには『第3回星空の会』と書いてあった。

女の子って大変なんだな

「ねえ浩太。ちゃんと先生の話を聞くのよ？
あとは——」

「分かったって！ もういいから！
じゃあ行ってくるから！」

僕はうるさい母の話を無理やり終わらせ、玄関を後にした。

今日は待ちに待った「第三回星空の会」があるのだ。
じかに見る『天体ショー』に僕の胸は躍る。
それに天気は快晴。天気予報によると夜も快晴らしい。
絶好の天体観測日和に僕は思わず顔をほころばせた。

がらりと部室のドアを開けると、そこには顧問の先生——加藤の
姿しか見えない。

「先生こんにちわ。
部長は——やっぱり無理でしたか？」

僕は部屋を見渡しながら質問をした。

星が大好きな部長。
実は彼女はこの「星空の会」に出席したことはない。

理由は両親が反対しているからだ。

女子が沢山いる部活ならともかく、うちの部は部長と僕の二人のみ。

そして顧問が若い男と来ている。

年頃の娘をもつ両親が警戒しても仕方がないのだとは思うけど…

…あんなに星を愛している部長がこの会に出席できないのだ。がっかりしている部長の姿が目につかぶ。

「残念だけど、仕方がないよ。」

部長には後で写真をプレゼントしてやろうな」

加藤はそう言うとおもむろに椅子から立ち上がった。

「そうそう。今回はちょっと趣向を変えてみることにしたんだ」

にかりと加藤が笑う。

そのなんともいえない含みの帯びた笑顔に、僕は思わずどきりとした。

買出し準備じゃなかったの？

「先生？ 何処で天体観測するんですか？」

僕は加藤をじろりと見る。

「秘密の場所」

そついいながら加藤はちらりとミラーを見てハンドルを動かした。

——今僕はなぜか加藤の運転する車の助手席に座っている。

あの後、急に加藤が「いくぞ」と言い出した。

僕はてつきり屋上で望遠鏡のセッティングをするものだと思っていたのだが、外に出るという。

……買出し？？ なのだろうか？

僕はうっかり置きそびれてしまったカバンを部室に置いてくると言っただが、加藤はその必要はないと言う。

で、車に乗せられて現在に至るのだけでも——。

一体何処に向かっているのでしょうか？

「先生？

スーパ―過ぎちゃいましたよ？

買出しに行くんじゃないんですか??」

僕は遙か後方に見えるスーパーの看板をぼんやりと眺めながら言う。

「——違うだろ——」

「はい？」

「二人でいるときは先生って呼ぶなよ。」

この前そう言っただろ?」

加藤はちらりと横目で僕を見ながら言った。

えーっと。さっき僕の質問にはスルーなんですか……?

「そんなの……いまさら難しいですって。」

だって先生は……やっぱ先生だし。

急に变えられないって言うか——」

『それに、まだやっぱり信じられないし——』

僕はそう言いそうになって慌てて口をつぐんだ。

脳裏によぎったのは、寂しそうな先生の——ケンタの顔。

全くちつとも似てないくせに、そういう時だけものすごくケンタのイメージとダブって見えてしまう。

——僕だって全然信じてないわけじゃない。

ケンタしか知らない秘密を加藤が言うときとか。

合間合間にみせるちょっとした仕草とか。

そんな時は絶対ケンタだと——自分でも驚くぐらい信じてしまっ

てるのだ。

でもやっぱり、それ以外のときは加藤は加藤であって、僕の担任で顧問の先生なんだ。

体は大きいくせにすぐ甘えてくるアイツ。

寂しがり屋で散歩好きで、雷には弱くてちいさくなって震えているアイツ。

ケンタのことは1から10まですべて知っていた。

——でも、僕は加藤のことは本当に何も知らない。

何処で生まれた、とか。

好きな食べ物、とか。

どんなところに住んでるのか、とか。

知ってるのは学校の先生ってことくらい……。

僕がそんなことを考えていると、加藤は「着いたぞ」と言っ僕
の頭を撫でた。

「こっつて……」

僕は驚きのあまり目を見開いた。

「俺、今度の星空の会はこっでしようって、そう思ってたんだ」

加藤はそう言つと照れくさそうに笑った。

夢なのかもしれない

「……先生……!!」

僕は車から降り、建物を眺める。

僕の目の前にはあのマンションがそびえ立っていた。

「約束……したからな」

先生はそう言うつと優しく僕の頭に触れる。

僕は思わず涙が出そうになった。

だって。

だってここは、ケンタと一緒に良く来た『秘密基地』だったから。

マンションが出来る前までは、広々とした空き地で、ちょっと高台に位置しているから星を見るのにつけてつけの場所だったんだ。

僕とケンタの秘密基地。

「このマンションを見たとき、なぜかここに住まなくちゃいけないって思ったんだ。

——何故かは最近まで知らなかったんだけど……『秘密基地』だったんだな……」

ぼつりと呟くその言葉は僕に向けてなのか、加藤自身に向けてな

のか——またはその両方なのか。

相槌なんかを打ってあげれば良かったのかもしれないけど、僕は驚きでいっぱいだったから、ただマンションを見つめていた。

「コウ？ とりあえず中に入ろうか？
セッティングもしなきゃいけないし」

加藤がそう言い、僕をマンションの中に促す。

僕は夢でも見ているんじゃないだろうか？
ぼんやりと歩く僕はなんだかふわふわとした、現実的じゃないような感覚に陥っている。

あ、そうか。

これ、きつと夢なんだ。

そう。夢。

夢。

夢か。

……。

——もし、夢だとしたら……どこから何処までが夢、なのかな？

そんなことをぼんやり考えていたら、加藤の顔が僕の目の前にいつの間にかあって驚いた。

「なっ！ なんですかっ！」

僕は加藤の肩を両腕で突っぱねる。

「それを言いたいののはこっちなんだけどな」

加藤はやれやれといった感じで僕から離れると肩をすくませた。

「観測ののセッティングするから手伝ってくれって言ってるんだけどな」

「観測……あっ！ す、すみませんっ」

僕はあたふたと天体望遠鏡のケースを開ける。
すると中身は既になかった。

「あれ？」

「おい。コウ。」

それはここに出してあるっば

加藤はくくくつと笑いながら「いつもの観測用の用紙の方だよ」と僕に教えてくれた。

星の降る夜

「ここでまた星が見れるなんて、思ってもみなかったな」

僕は満点の星空を見上げて呟く。

暗闇とまでは行かなくても、結構な高層マンションの屋上に居るため、学校で見る夜空よりも綺麗に星が見えるような気がする。

キラキラと煌めく星ぼしを見てみると、まるで自分もその星になったんじゃないかという錯覚さえ起こしてしまうようだ。

「綺麗だろ？」

加藤は静かにそう言うと、僕の横に座る。

「夜はちよつと冷えるから、これでも羽織っておけ」

そう言うと僕にパーカーを掛けてくれた。

確かに夏とは言え、多少の肌寒さを感じていた僕は素直にそれを受け取った。

「ありがとう、先生」

そう僕が言うと、加藤は『どういたしまして』と言わんばかりに僕の首に唇を寄せる。

加藤の吐息が僕の首筋に触れた。

え……と。

——なんだかドキドキする。

でも、これって、ケンタが甘えるときにする仕草……。

いつもなら「やめてください」と言うところなんだけど、なぜだか僕は拒む気にはなれなかった。

加藤はやっぱり……ケンタなんだ。

僕は自分でも驚くくらい、素直にそう思った。

「コウ？」

ケンタが僕の顔を覗き込んで首をかしげる。

「なに？」

ケンタは僕の涙をぺろりと舐めると、悲しそうな顔をした。

「俺、なんか悪いことしたかな……」

アレ？ いつの間に涙なんか出てたんだろう？

最近の僕はどうも涙腺が緩くてどうしようもないな……。

僕は涙をこしこしとこすると、目の前に居るケンタをぎゅっと抱きしめた。

「コウ??？」

「ケンタが悪いんじゃないって……」。

本当に先生がケンタだったんだって思ったら、なんか勝手に涙が出

ちゃって……」

そこまで言うと、ケンタは僕のことをギュッと抱きしめかえた。

そして——やっぱり僕の首筋に唇を寄せる。

……ケンタの吐息が掛かる度、何故か僕の心臓はドキドキと鼓動を早めたけど

でも、それは全然嫌じゃなくて……。

——星の降る晩。

僕たちは、『秘密』を共有することになった。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9109j/>

僕の犬は先生？！

2011年2月3日10時36分発行